

大学における学習及び生活

本年度も、高校調査書学習成績、共通第1次学力試験成績、第2次試験成績と学内成績との関係についての調査研究が、非常に多くの大学で行われている。大学入試は、大学教育を受けるにふさわしい能力・適性等を備えた者を選抜するために行われるものであるから、各大学・学部または学科等にふさわしい学生を入学試験で選んだかどうか、すなわち、入学後、良い学内成績をあげることのできる学生を、高校調査書学習成績、入学試験成績などをデータにして選抜しているか否かを考察するために、このような調査研究を行うのは当然のことであろう。調査の方法としては、相関係数によるものが多く、それに散布図を加えているところ、また一部の大学であるが、因子分析を行っているところもある。

高校調査書学習成績、共通第1次学力試験成績、第2次試験成績のうち、入学後の学内成績との相関が最も高いのは、高校調査書学習成績との間のものであるという結論が、ほとんどすべての、調査大学から報告されている。このような結論が出るのは現在の学力試験では共通第1次学力試験成績と各大学が行う第2次試験成績とが主データとして用いられ、高校調査書学習成績は副次的データとしてしか利用されていないので当然のことである。一方、高校調査書学習成績を数値化して利用している大学や、高校調査書学習成績を主なデータのの一つとして選抜を行う推薦入学実施大学では、高校調査書学

習成績と共通第1次学力試験成績との関係を調べて、いわゆる高校間格差に相当する量を算出し利用する方法を研究している大学がいくつかある。

成績を示すデータとして用いられているものにも色々ある。まず、入学後の学内成績であるが、成績評価A～D（あるいは（秀）、優、良、可、不可）を（4）3～0点として、大学在学中の成績の平均点を用いている大学が多いが、これらを教養（あるいは一般教育）、専門科目に分けたり、更に詳しく、各々の科目の成績にまで分けたり、また、科目の最終成績評価（A～D）ではなく、学期中に実施された、各科目の2回の試験の素点をデータとして分析している大学もある。卒業論文を重要な科目として考え、その成績だけでなく指導教官の、成績以外の評価も含めてデータとしているところもある。このように、より詳しい学内成績をデータにして考察している大学がある一方、これとは逆に、学生を成績の大きな階層に分けて研究している大学も多い。例えば、成績を上位、中位、下位に分ける、または進級組か留年（あるいは退学、休学）組に分け、好ましくない留年組や下位組に入ってしまうような学生の、高校調査書、入試成績の特徴を考察する、また医学部では、医師国家試験合格者、教育学部では、教員採用試験合格者の特徴を考察するなどである。

入学試験成績では、共通第1次学力試験と第2次試験の各々の総点及びその合計点がデータ

として用いられていることが多いが、ここでも詳しく、各教科・科目の得点、更に、設問、小問の得点をデータにして分析している大学もあるが、逆に上位入学者、下位入学者と層別にして分析している大学もある。

高校調査書のうちでは、評定平均値の平均(1.0~5.0)が用いられていることが最も多いが、各教科の評定平均値、更に各科目の評定までをデータにして分析している大学もある。また、学習成績概評(A~E段階)を用いている大学もある。非常に数は少ないが、行動及び性格の記録を数値化し、学内成績との関係を分析している大学もある。

推薦入学や2次募集を実施している大学では、一般の学力試験による入学者との比較研究を行っているところが多い。推薦入学者については、一部の大学を除けば、一般の学力試験による入学者よりも、学内成績は良く、留年率も低いことが報告されている。また小論文、面接の

評価方法に関する研究や、これらの評価値と学内成績との相関に関する研究も行われている。

大学における生活に関する調査研究の報告は、学習に関連する調査研究に比べて少ないが、いくつかの大学で実施している。新入生あるいは在学生(本年度の例では2年生、4年生)、卒業生に、アンケート形式で、入学試験に関する意見、志望理由や動機と共に、入学前の、大学生活や講義勉学に対する期待度と、在学生、卒業生に対しては、満足度を調査し、例えば入試成績や学内成績と期待度、満足度の関係などを含め、分析研究している。

以上のように、色々なデータと学内成績との関係を調査検討し、多くの結論が得られているが、その中には一致するものも多いが、相反するものも少なくない。他大学の研究結果を利用する際には、その調査研究を自大学で追試してからにすべきであろう。